

奈良県立国際中学校・高等学校

奈良県 奈良市

<公立 共学 帰国入試 転編入>

[学校ホームページはこちら](#)



〒631-0008 奈良市二名町1944番地12

近鉄奈良線「学園前」よりバス12分

けいはんな線「学研奈良登美ヶ丘」徒歩15分

沿革

2020年4月に県立登美ヶ丘高校地に国際高等学校を設立し、英語での授業やグローバル探究を教育の中心に位置づける。

2023年には中学校2クラスを新設して、MYP(Middle Years Programme)の候補校として、国際バカロレア(IB)の理念に基づく探究教育を実践、あわせてDP(Diploma Programme)に向けた取り組みも行っている。中高一貫校として、中学からの入学者は、選抜を経ずに国際高校に進学できる。文部科学省WVLコンソーシアム構築支援事業拠点校として、他校とも連携して奈良県の国際教育を牽引する。

教育の特色

中学、高校ともに、創造力、探究力、協働力、寛容さ、挑戦力、キャリアデザイン力の6つを育みたい力(Generic Skills)として、少人数で習熟度別の授業をネイティブ教員で行う英語教育や中高6年間を通したグローバル探究、高校1年で全員が5カ国語を学んだり、中間・期末テストがなく単元別のテストや課題に取り組んだりするなど、県立校には珍しい特色ある教育、主体的な学びを行っています。

①中学校

・全クラスIB教育

新学習指導要領で定める探究的な取り組みはIB教育との親和性が高いと考え、全クラスIB教育となります。「ミライを創るのはわたしたち ～For a better and more peaceful world～」を掲げ、社会で起こっていることに目を向け色々な人と一緒に取り組む生徒を育てることを念頭に置き、授業は文部科学省が認めた教科書を使いながらIBの枠組みに沿って進められます。中学校の授業を見学させていただきましたが、椅子に座って先生の話をしているものではなく、双方向の授業をされていました。生徒同士が活発に意見を交わしたり、先生がその話し合いを楽しそうに聞いたり、私たちの質問にも臆せずはきはき答えてくれたりと、見学している私たちも笑顔になってくるような授業でした。また、その時間に授業がない先生が何人かヘルプで参加していらっしやったのですが、生徒たちが楽しそうにしていることはもちろん、先生方も楽しそうに授業をされているのがとても印象的でした。知識の定着は前提でありそこから知識を発展させることがIB教育であるという考えのもと、授業は、知識を伝達するだけではなくそれを発展させ、グループの中で教え合う学習を通して学んでいくというスタイルを大事にいらっしやるとのことです。そのため、一問一答になりそうな社会の授業でも、「なぜ？」という問いが多く出てくるとお聞きしました。教室の壁に貼ってある時間割や学習者像も、IB教育を取り入れたものになっているため特色があり、興味深く見させていただきました。例えば時間割では、国語が「言語と文学」、社会が「個人と社会」、技術・家庭が「デザイン」、美術や音楽が「アート」、英語が「言語の習得」というように呼



び方が変わります。言語の習得という呼び方によって、英語に限らずさまざまな言語を習得するイメージが湧くような気がしました。

・グローバル探究基礎

探究基礎の時間が週に2回あるのもこの学校の特徴です。ボルネオ島について学んだことを発表したり、高校生のワークショップに参加したりして、プレゼンテーションの基礎を身につけ、高校での学びにつなげます。このように早くからプレゼンテーションの場をたくさん設けているため、生徒たちはプレゼンテーションの力をつけることができ、小学生への説明会でも中学生が保護者や小学生の前で動画も駆使した学校説明を行ったそうです。

②高等学校

・グローバル探究

SDGsなどの課題について3年間を通して週3時間、大学のゼミのようにテーマごとに1人または少人数のグループで行います。6つのゼミを教員2人ずつが担当し、まちづくり、グローバル、多様性、地球温暖化、生物の多様性、伝統文化などのテーマの中から、クラスに関係なく各自で選択することができます。そして外国人講師によるセッションを受けたり、2年生のスタディツアーでは現地の人々や大学生と協議を行ったりします。3年生では、高校生国際会議を開催し、国内外の高校生が6つのテーマについて英語で発表し、持続可能な社会に向けてできることを奈良から発信します。ほかにも、連携している大阪公立大学に生徒たちが出向き、出張講義と称し大学生の前でSDGsのテーマについて講義をすることもあるそうです。このように探究の時間でSDGsに力をいれているため、SDGsをやりたいからこの学校を志望する生徒もいるとお聞きしました。それだけではなく、昨年卒業した1期生の中には、ビジネスを学びながらこの学校のグローバル探究で出合った「ボルネオ島の環境問題」についても活動をしたと、マレーシアの大学に進学した生徒がいるそうです。

・世界の言語

また、この学校では英語以外の言語についても学ぶ機会があります。必修科目として、1年生で5つの言語(中国語、韓国語、スペイン語、フランス語、ドイツ語)の基礎と文化をそれぞれ8時間ずつ学び、2年生でそのうちの1つを選択し、週2時間学びを深めます。希望者は3年生でも継続履修が可能です。授業はネイティブ教員と日本人教員の2人体制で行われ、「世界の言語」の授業がある日は、職員室はさまざまな言語が飛び交っているそうです。

・留学

在学中に長期留学が可能で、留学前に在学留学か休学留学を選びます。AFS、JFIE(日本国際交流振興会)、YFU(公益財団法人YFU日本国際交流財団)、トビタテ!留学JAPANなどの外部団体による留学を行っています。毎年何人か留学する生徒がいるそうです。

・海外大学進学

海外の大学による進学説明会を年数回実施しています。また、企業とも連携して指定校推薦や奨学金を受けられるようなサポートも充実しています。そのため、国内の大学と同様に海外の大学への進学も視野に入れやすいのではと思います。国際科plusでは、2年生と3年生でEAP(English for Academic Purposes)という授業を選択でき、この授業では、レポートやエッセイを海外の大学でも通用するレベルで書けるように、ネイティブ教員が徹底的に添削指導しています。これは、海外進学を目指す生徒が、英語でアカデミックな論文を読んだりレポート作成をしたりするなど海外進学に必要な英語の能力を向上させるものになっています。



先生よりひと言

本校の自慢の第1は本校の生徒です。チャレンジ精神にあふれ、探究心をもって何事にも積極的に取り組んでいます。第2は本校の先生方です。教科に関する知識や技能にすぐれているだけでなく、生徒の探究的な学び・活動を真摯に支えています。

国内や海外の大学進学を目指した基礎学力の充実を図りながら、これからの社会で生きていく上で必要な力の育成に重点を置いています。これまでの国際的な経験をいかし、新たな機運に満ちたこの学校で一緒に未来を創りましょう。



帰国生受け入れについて

※最新の情報は、学校ホームページおよび奈良県教育委員会の入学者選抜概要でご確認ください。

①受け入れの理由、求める帰国生像

充実した国際教育を行う「世界を身近に感じる高校」として帰国生を積極的に受け入れている。これからの国際社会に必要とされる力をのばして欲しい。

②選考

高校の帰国生徒等特例選抜および特色選抜では、学校独自のライティングと口頭試問を行う。ライティングの前年度テーマは県政・情報センターで閲覧できる。口頭試問は個人面接方式で、英語で表現する力をみる。一般選抜で入学する帰国生もいるが、海外大学への進学を目指す場合は、海外大学進学に対応した授業を設けているので国際科 plus を勧める。編入学試験は国語、数学を作文に代えるなど帰国生の事情に配慮した内容で、今後は急な帰国にも対応する予定。

中学の国際選抜(募集5名)では、保護者とともに居住し、居住地から通学できる者は県外からも出願可能。高校に進学後もそのまま県外から通学できる。

③必要な準備

思考を深められるように、すべての授業に対応できる国語力があることが望ましいが、基礎力があれば入学後にのばすことができる。

④受け入れ後の状況

留学生やネイティブ教員が多く、生徒同士が英語で話す環境もあり、違和感なく溶け込んでいる。帰国生だからという特別なカリキュラムはないが、個人の学力に対応した ICT 教材などで必要な学習ができる。



かけはしより

校長先生とのお話の中で、生徒の「なぜ？」を大切にしていることがとても印象的でした。そして、授業を見学させていただき、先生方が生徒の主体性をとても大切に尊重してくれていると感じました。また、県立校であるにもかかわらず中学校の国際選抜では県外からも出願できるという画期的な制度を取り入れたり、文部科学省 WWL の拠点校に認定されたり、企業の助成を受けながら研究発表をしたり、企業と海外大学進学推薦制度の協定を結んだり等、今までの公立校にはなかったさまざまな取り組みを積極的にされており、「ミライを創るのはわたしたち」というモットーのもと、一歩先を進んでいる学校だと思いました。

担当者から見た学校の特徴 グローバル探究・海外進学・世界の言語